
通史：半世紀のあゆみ
青春のパライストラ
「未来のビジョン」を

編集部

1. 絶対的部員不足

ここに藤田裕充監督が訴える、我が部の未来のビジョンを描ききれない最大の支障となっている、昭和61年度当時の「実情」の記録がある。

◇

現在、関西大学の各体育部が抱えている問題はいろいろあるのですが、そのなかで一番の問題は、絶対的部員数の不足であります。関大の体育部が、今日低迷しているのは、各部に「経験者」が入部していないのが最大の原因であると同時に、大学当局の「体育会活動」に対する未来のビジョンが無いのが、各部の混迷とジレンマを招いているのです。

我がレスリング部も部員の数においては、他のクラブとなんら変わるところがなく、困難な立場にある。去年（昭和60年度）の例をとっても、15人中1人だけが、経験者という有り様でした。どんなスポーツもそうであるように、大学生が肉体的に闘える状態になるには、最低2年間の時間が必要です。しかし我がレスリング部は、この少人数、未経験者の集団でありながら、我々指導者が思ってもいなかった「優勝（2部）」という輝

かしい栄誉を勝ち取ったのであります。

こんなことを言えば、現役諸君に大変に失礼であると思うけれど、正直いって、喜ばしい誤算でありました。

常々感心しているのは、それまでの3年間を無為に過ごしているように思えるのに、最上級生になると、すべてが自覚し、自主独立の気風をもって、後輩部員を、立派に目標に向かって一丸にまとめながら、引っ張っていく事実です。1部優勝という目標には、程遠いところにいるのですが、大学生活4年間を通じて学業とクラブとで、有形無形の間人修行をしてくれたことと思います。この事実には「感動」するのみであります。

レスリングは素晴らしいスポーツであると自画自賛しています。藤井、中西、有藤、薩摩、津田の諸君、最後に素晴らしい感動をありがとう。4年間ご苦労さまでした。今度は、社会人1年生として、また「一」から頑張ってください。

（「OB会誌」）

◇

昭和61年5月23日に「関西大学レスリング部新入部員歓迎会」が開催されている。その記録も同「OB会誌」に収められてある。



本年（昭和61年）度も下記の2名の新生が入部いたしました。強くなるともならないとも、また、続くかどうかは別にして、レスリングというスポーツへの情熱に向けて、学生生活を、かけるために入部いたしました。これも、コーチ並びに現役先輩の「勧誘の努力」の賜物であります。同時に、こうした、青春時代のひたむきな「こと」は非常に意義のあることであると感じます。どうかOB諸兄には、温かい目で、育て上げていただくようお願いいたします。



下記の2名とは、百木健と松田幸大のことである。藤田監督の指摘のとおり、4年後の彼ら2人は立派に主将と副将としてリーダーシップを発揮することになる。そして、その4年間、彼ら2名のほかに同級生は誰も入部していない。昭和61年には、「新人類」という新語が登場している。高度経済成長時代の申し子を、そう呼んだ。好きなものには熱中するが、嫌いなことには振り向きもしないという「新人類」が出現したのである。ちょうど百木と松田あたりの世代の若者を指している。だがこの「新人類」表現からすれば、百木と松田の2人は、変わり種である。新人類の好きなこととは、安直な「自分のやりたいこと」のみをいう。レスリングは決してその対象にはならないだろう。この当時から、そうした時代風潮に影響されて、我が関大レスリング部への入部者は「金の卵」にも等しい貴重な少数分子となってきた。我がレスリング部は、このような時代相に直面しながら、昭和62年に創部40周年目を数えることになるのだが、「OB会誌」（61年度）には、その件に関して次のように記録されている。



早いもので本年で関大レスリング部の創部40周年を迎える次第です。そこで、ひとつの区切りと

して、当OB会では、いかなる行事を行うか審議したわけですが、松井名誉会長より、……華々しいことはやめて、内々でOBだけが参集して次回の「OB総会」と「40周年式典」を兼ねて挙行し、50周年時に……盛大に行うのが望ましいのではないか、と提案があって、出席者全員の賛成を得た……。 (OB会「議事録」)



実情は、「一進一退」を脱しきれない状況下において、自粛しようということであった。



写真▷リーグ戦での「セコンドの役割」

2. 昭和61年（1986）・関大100周年

風俗・流行・歌 新人類・円高差益／テ
レクラ・ファミコン／♪『DESIRE』

藤井主将の所感を引いておこう。



卒業を間近にひかえて、いま思うことは、4年間で本当に短かったということである。そしてその4年間、真剣に取り組んだものは、レスリング

だけであった。そのレスリングの思い出は、いろいろとある。

1年生のときの春季リーグ戦で1部に昇格した。このとき、リーグ戦のあの独特の雰囲気には非常な驚きと魅力とを感じた。入部してすぐに1部昇格という幸運に恵まれ、そして秋には、1部3位で、私は常勝関大のなかで1年間を過ごしたのである。

2年生までは1部の「マット」。しかし3年生になってレギュラーとして戦った春のリーグ戦では2部に降格してしまった。このとき私は、先輩方の偉大さ、自分の力のなさを痛感させられた。そして4年生となり、主将になってはじめてのリーグ戦では、2部で2位という「自分の現役時代」で最悪の成績を残すことになってしまった。けれども最後のリーグ戦では、2部で優勝することができて、ホッとした。

4年間をとおして、泣きたくなるような地獄の合宿、泣く涙さえも枯れてしまった減量、そして負けると恐ろしい試合、……と苦しいことも多かった。だが上級生になって、後輩を鍛えることによって、いつか、鍛えるにたる人間になろうと努力するようになっていた。現代の社会では忘れ去られている「厳しさを追求する心」「伝統を重んじる心」を、そして「感動する心」を、4年間で教えてくれた。そのレスリング部に、「ありがとう」と言いたい。そして1部の「マットの味」を与えてあげることのできなかった後輩たちには、悔しさを忘れずに、1部復帰を目指して、頑張ってもらいたい。(藤井信孝・S62年卒)



この年11月2日(日曜日)、関西大学は、「関西大学創立100周年記念式典」を、会場を「大阪城ホール」に定めて、厳かに挙行了した。来賓、校友、関係者などの出席者は実に1万3千名を数えて、まさに世紀の祭典であった。式典当日の朝刊

8紙には、関西大学のイメージ広告が一斉に掲載された。すべて全面広告で、「関西大学は11月4日に100周年を迎えます」と広く社会にメッセージを送っている。「11月4日」は、関西大学の、創立記念日ではある。それらのメッセージを『関西大学百年史・通史編・下』は次のように要約して紹介している。

留学生と肩をならべる男女の学生像は国際化時代を象徴し、「私たちのキャンパスは地球です」の簡潔なコピーが一行だけのものと、「100年前、5歳7道の国々から。そしていま、世界の国々から」と歴史をふまえた3行のコピーのものには「KANSAI UNIVERSITY」の横文字がめだつ。前者は朝日、毎日の両紙に、後者は読売、サンケイの2紙に掲載された。もうひとつは、「100年前、12人の怒れる男たちがいた」のコピーに創立者の写真を配置した図柄で、日本経済、京都、神戸の3紙に掲載された。これらの広告は「関西大学100年」を社会に強く印象づけた。



写真▷「創立100周年」を迎えました

記念事業も、「100周年記念会館」の建設などと、多彩であったし、式典やその他の行事も、著名来賓を内外から招いて盛大に挙行されたことはいうまでもない。ここでは、上記の「広告」の意味する関西大学の「心意気」を記しておくことだけにとどめておきたい。ただひとつ、関西大学の記念募金の呼びかけに、大勢のレスリングOB諸氏が応じていることだけは明記しておきたい。

3. 昭和62年(1987)・創部40周年

風俗・流行・歌 円高不況・靈感商法/
占いブーム・朝シャン/♪『雪国』

前出の「創部40周年」の年がやってきた。4月4日「創部40周年記念行事実行委員会」が開催されて、7月11日に内輪で祝うことと、プログラム内容が決定されることとなった。

① 記念講演会：2題

ひとつは当時の日本レスリング協会顧問を務めていた村田恒太郎氏（OB会顧問）を講師に迎えて、「レスリングと日本社会」と題する有意義な「経験放談」を拝聴したのであった。

もうひとつは関西大学商学部教授の高堂俊彌先生（関大レスリング部・部長）を講師に迎えて、「円高と日本経済」と題する有意義な「世相状況分析」を拝聴したのである。

② 40周年式典

式典は次の次第で進行して盛会のうちにとどきおろなく閉会することになった。

▷ 司会：松浪 啓一副会長

- ▷ 開式：学歌斉唱
- ▷ 黙禱：「関係物故者に対して」
- ▷ 挨拶：溝畑 武夫会長
- ▷ 挨拶：松井 清名誉会長
- ▷ 顕彰：永田与四郎氏（OB会顧問）
「講道館八段昇段・喜寿のお祝い」並びに、
「戦後まもない混乱の時期に、関大レスリング部のため柔道場を無料貸与していただいたことに対する感謝の意を表して」
- ▷ 記念品贈呈：OB会「旧役員」諸氏へ
「功労を讃えて」
- ▷ 祝宴挨拶：東 維明（昭和26年卒）
- ▷ 万歳三唱：木村 正三（初代主将）
- ▷ 閉会の辞：宇賀大三郎副会長



写真▷当時の総会「ワキアアイです」

高堂部長が、この「40周年式典記念講演」で、サムエル・ウルマンの「青春の詩」を朗読して、すべてのOBに、「青春のパライストラ」の心を、原文と作山宗久「訳」の紹介で贈ってくれた。



青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたをいう。

薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな肢体ではなく、たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱をさす。

青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは怯懦(きょうだ:臆病)を退ける勇氣、安易を振り捨てる冒険心を意味する。

ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青春がある。

年を重ねただけで人は老いない。

理想を失うとき初めて老人になる。

歳月は皮膚にしわを増すが、情熱を失えば心はしぼむ。

苦悩、恐怖、失望により気力は地に這い、精神は芥になる。

60歳であろうと16歳であろうと人の胸には、驚異に魅かれる心、おさな児のような未知への探究心、人生への興味の歓喜がある。

君にも吾にも見えざる駅通(えきてい:次から次へと送り届けること)が心にある。人から神から美・希望・喜悦・勇氣・力の靈感を受ける限り君は若い。

靈感が絶え、精神が皮肉の雪におおわれ、悲歎の氷にとざされるとき、20歳であろうと人は老いる。

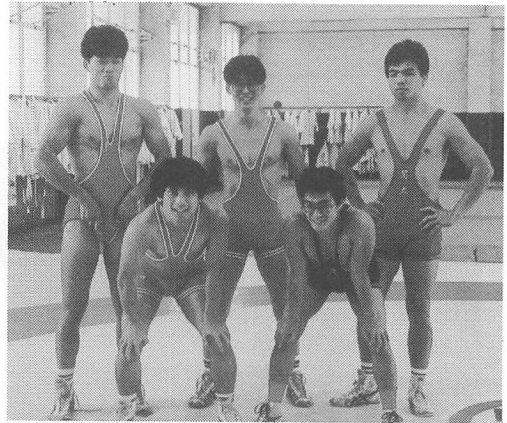
頭を高く上げる希望の波をとらえる限り、80歳であろうと人は青春にして已む。

◇

我がレスリング部OB会の「諸氏」よ、サムエル・ウルマンに、見倣おうではないか。関西大学レスリング部よ、「青春の詩」を、高吟しようではないか。そこには、常に「青春のパライストラ」が存在しているのだ。ここに、関大レスラーに贈る、藤田監督のメッセージがある。

「女性に惚れるごとく、レスリングに縁あれば、もっともっと惚れて惚れて惚れぬいてほしい」

レスリング、それは、青春であるはずである。そしてそのレスリングに感銘する集団もいる。昭和63年度の主将になる岡本隆志が、卒業していく白神主将、米沢副将、芳賀副将、森本主務、新垣学連委員に、次の言葉を贈っている。青春時代に体得した感謝の心である。



写真▷昭和62年の「みんな頑張ってます」

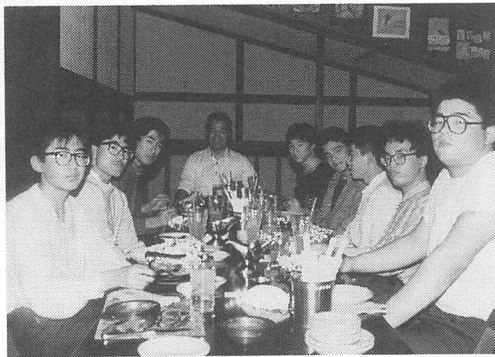
◇

……入部したときから、先輩方のまとまりの良さは私たちの目標でもありました。入部したてのころ、レスリングについて何も知らない我々に毎日のように注意して下さったご苦労は、私が先輩をもったときに、はじめてわかりました。そして幹部交代を終えて、我々が幹部となったいま、先輩方がこれまでやってこられたことの大きさを実感しています。13人という少数で、先輩方がいつもクラブの中心としてリーグ戦に活躍され、この1年間、幹部としてクラブを引っぱってこられたことは、伝統ある関大レスリングにとって、誠に価値のあることだと思います。我々後輩一同、2部優勝1部復帰を目指して練習に励みます。
(「OB会誌」)

◇

こうした関大健児たちのためにもレスリング環

境「青春のパライストラ」を再整備する必要がある。これは指導陣がこぞって追求してきた長年の懸案事項である。その努力が実って、ついに対策事業のひとつであった「関大一高レスリング部」が復活することになる。「一高」のOBでもある佐藤秀雄（当時の関大レスリング部コーチ・昭和42年卒）の「報告」に、その様子を訊ねたい。



写真▷再生した関大一高レスリング部



……「関大一高にレスリング部を！」。これは一高OB、関大OBからも長年にわたって待ち望まれていたことであり、ここに関係各位の絶大なご支援ご協力のもとに、昭和62年7月11日、見事に復活しましたことを報告申し上げます。

そこで、関大一高レスリング部現役の激励を兼ねた関大一高レスリングOB総会が、同9月12日（土）に、マンダリンパレスで、午後6時から、一高OB、来賓、現役の総勢24名の参加のもとに開催されました。

松井清名誉会長、山本定夫（一高OB会）会長の挨拶に続いて、関大一高の西岡校長、溝畑関大レスリング部OB会長の祝辞と激励がありました。なかでも松井名誉会長は、特に部員の確保と

必要性について、「関大レスリングOBの幾多の名選手も、その第1歩は、諸君（一高現役）と同じく未経験者であったが、その後の努力で、世界的な名選手に成長した。その中核的な働きをしたのが一高出身者であった」ことなど、指導者としての貴重な経験談を、（一高の）現役に話されました。続いて山本会長が、一高レスリング部の発足の経緯と、今日までの歩みを語られ、「今後は、関係各位のご協力を得るなかで、一高OB会が全面的に現役を支援し、一層の発展を期す」との決意と抱負を述べました。

来賓祝辞として、溝畑（関大）OB会長から、関大一高レスリング部の今後の活躍と、一高OB会の発展を祈念してやまない旨の挨拶がありました。さらに関大一高校長の西岡先生より、「諸先輩が築きあげてこられた一高レスリング部がここに復活し、今後の奮闘に期待するとともに、そのための学校側としての努力を惜しまない」旨の表明がありました。

このように諸先輩からの激励を受けて、一高の谷口キャプテンをはじめ、各役員より、「当面する新人戦で頑張ります」との力強い決意が述べられ、我々がその昔、諸先輩から、叱咤激励された情景が重なって、胸が熱くなりました。

次に一高の監督に就任された伴先生の乾杯で懇親会が開催されました。並行して行われた自己紹介では、「〇〇先生のときは、0点であったが、いまはレスリングをしていたお蔭で何とか社会人の一員として頑張っている」とか……「これ以上顔に変化をきたしたら女の子にもなくなるので、耳を潰さないために、練習の工夫をした」などと、ユーモアを交えて体験談が話され、会場は爆笑に包まれ、懇親会の盛り上がりは最高潮に達しました……。 （佐藤秀雄手記「OB会誌」）



先に「一高顛末記」の結論を記しておく。後段

で、安田忠典OB（平成3年卒）に触れてその真相を書くことになるが、ここでは、端的にこの計画が頓挫してしまったことを述べておかなければならない。事情は複雑である。ある人間の一生を左右することにもなる最大限の努力もした。だが、駄目だった。そしてこの「一高復活」は、「頭を高く上げ希望の波をとらえ」ながら、さらに苦悩を重ねながらやっと手に入れた果報であっただけに、昭和62年からしばらくの間は、すべての鍵を握る大変革として受け止められてはいた。そしてその希望の絆は、堅固に、着実に、将来に向けて開花するはずではあった。藤田監督の顔には、その希望の光が、照らしだされていたのである。

4. 昭和63年（1988）・手掛かりが

風俗・流行・歌 カウチポテト族・逆輸入車／中国育毛剤「101」／♪『乾杯』

この年はソウル五輪の年である。昭和63年度は、「関大一高復活」のニュースも含めて、レスリングOB会にとって、多事多端の年となった。まず藤田監督「所感」を引いたのちに、後学のためにも、関西大学レスリング部OB会の1年間の活動実態の活況ぶりを正確に記録しておきたい。

◇

学園紛争以来、長い長い暗いトンネルから、いまだ脱出することができず、数多くの先輩たちによって、営々と築かれた「血と汗と涙の栄光ある関大レスリング部」も、いまは色褪せて見えるこのころの状況である。しかしあくまで後退することなく、少しずつでも前進を試し、明日こそはを、合言葉にして、あくなき挑戦を繰り返し、常勝関大の復活のために、努力し邁進していく所存です。

さて今年は久しぶりに、復活した関大一高レスリング部から、第1期生ともいえる有望な新人たちが入部し、「王者復活」への手掛かりの第1歩を踏み出すことになりました。第2歩目は、いかに数多くの新入生を、勧誘で、獲得することができるかにかかっています。しかしそれもまた、困難というよりも、楽しい励みのひとつではありません……。 （藤田裕充手記「OB会誌」）

◇

こうして昭和63年度は始まった。併せてこの1年間の「OB会活動」を概括しておきたい。

- ▷ 5月21日 OB会定例総会。
- ▷ 6月12日 「関西大学体育OB会名簿」発刊への協力。「名簿提出」「協賛広告11件」
- ▷ 6月15日 春季リーグ戦始まる。至18日。結果は2部3位。
- ▷ 7月16日 松井清氏「勲四等瑞宝章叙勲祝賀会」。本会から48名出席。
- ▷ 9月 「ソウル五輪」へ。関係出席者＝松井清・溝畑武夫・伴義孝・鶴谷正夫・住谷昌昭の各氏。
- ▷ 10月15日 代表連絡会議。出席者＝溝畑武夫・清谷利次・横山勝利・柏木貞夫・北川俊治・阿部進の各氏。
- ▷ 10月15日 「京都国体」至19日。関係出席者＝松井清・押立吉男・溝畑武夫・佐々木敏・伴義孝の各氏。
- ▷ 10月23日 関西大学ヨット部の「創部40周年記念式典」。出席者＝松井清・溝畑武夫・伴義孝の各氏。
- ▷ 10月23日 関西大学ハンドボール部の「創部40周年記念式典」。出席者＝松井清・溝畑武夫・伴義孝の各氏。
- ▷ 10月30日 関西大学拳法部「学生選手権3大タイトル・10連覇達成祝賀会」。出席者＝

溝畑武夫・宇賀大三郎・柏木貞夫・松浪啓一
・伴義孝の各氏。

- ▷ 11月1日 「関関体育OB懇親会」。出席者＝松井清・溝畑武夫・柏木貞夫・伴義孝氏。
- ▷ 11月11日 1988年度「関西大学体育OB会親睦ゴルフ大会」。出席者＝松井清・岸本盾一・乾哲夫・福家義夫・西本浩・田辺嘉之・住谷昌昭・北川俊治・伴義孝の各氏。
- ▷ 11月22日 関西大学ボクシング部の「創部60周年記念式典」。出席者＝松井清・溝畑武夫・宇賀大三郎・伴義孝の各氏。
- ▷ 11月24日 秋季リーグ戦始まる。至27日。結果は2部3位。
- ▷ 12月16日 レスリング部「納会」。出席者＝高堂俊彌・松井清・柏木貞夫・佐藤秀雄・藤田裕充の各氏。
- ▷ 1月25日 大島鎌吉スポーツ文化賞「1582人+α委員会」の入会打合せ会。出席者＝松井清・溝畑武夫・清谷利次・宇賀大三郎・佐々木敬・柏木貞夫の各氏。
- ▷ 2月18日 新年宴会。伴義孝OB「スイス留学」歓送会を兼ねる。
- ▷ 2月27日 関西大学体育OB会理事会。出席者＝松井清・宇賀大三郎・柏木貞夫・伴義孝・北川俊治の各氏。
- ▷ 3月4日 レスリング部卒業生歓送会。出席者＝高堂俊彌・柏木貞夫・佐藤秀雄・藤田裕充の各氏。
- ▷ 3月17日 関西大学体育OB会総会。出席者＝松井清・宇賀大三郎・佐々木敬・柏木貞夫・伴義孝・北川俊治の各氏。
- ▷ 3月30日 大島鎌吉スポーツ文化賞贈呈式挙。本会からの賛同者（入会者）60名。
- ▷ その他関連会議多数に、分担して、出席。慶事「OB関係結婚式など7件」への対応。弔事「8件」への対応。



写真▷ソウル五輪「決勝審判」の伴さん

書き出しに「多事多端」と書いたのは、慶事が続いたためであって、活動内容そのものは、毎年、上記のような経過をたどる。このように整理してみれば、関西大学レスリングOB会が単なる趣味の会でないことがわかるだろう。大学スポーツの「OB会」なるものは、その活動の頻度に多少の偏差はあっても、「目的」や「基本的な活動理念」などは似通っている。第1に、ボランティアではあっても、格段に効果のある教育施設にほかならない。もうひとつの特長は、世界的にみて、このシステムは日本文化の特徴だと断言して憚らない。まさに、大学とスポーツとを媒体にしての、「学生」と「OB」の、若い世代と先人の、継続接点の間ではある。そこで醸成されて、培養されて、受け継がれていって、さらには新しく生まれる「文化」の意義は大きい。

関西大学レスリング部創部40周年を迎えてまもなくして、昭和は幕を閉じることになった。昭和天皇が崩御されて、1989年1月8日午前0時0分10秒に、「平成」が生まれた。昭和63年度の「O

B会誌」には、溝畑武夫会長の巻頭言で、関係者の動静にも触れながら、その「平成元年を迎えて」さらなる前進を期す抱負が語られている。

◇

OB会のみならず、波瀾に満ちた昭和の激動期を通して、各自が有意義な青春を送り、送りつつあった我々が、新しく改元された「平成元年」をうち揃って迎えることができましたことは、「リクルート」疑惑に荒れ狂い、また消費税問題に混乱をきたし、先行きに不安を覚え、不透明さを感じずきょうこのごろとは申せ、誠におめでたく心よりお慶び申し上げます。

我が母校関西大学の創立100周年を壽ぎ、レスリング部も弛みなく生長を続けている現在、我がOB会の執行部も改選され、新たなる第一歩を踏み出しつつあります。そこで原点に還り、基本を確認し、すべての会員の意志と希望を反映した、フレッシュで、なおかつ、より親しみを感じるOB会に進展すべく頑張ってお参ります。宜しくご鞭撻とご支援をお願い申し上げます。

さて昨秋のソウル・オリンピックで「弱い日本」と言われたなかで、唯一我がレスリングだけが、金3個、銀2個という輝かしい成果をあげましたことは誠に慶ばしいことでもあります。また我がOB会よりも国内外で多数が役員として頑張っておられます。諸先輩のご努力の賜物と心より御礼とお祝いを申し上げます。

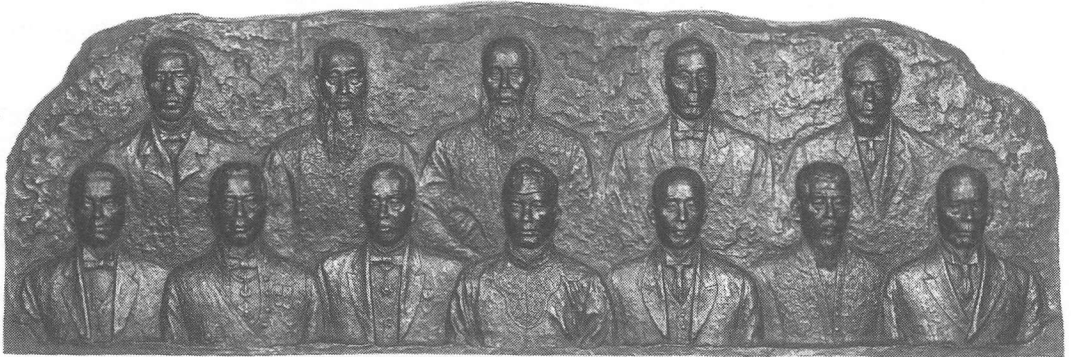
永年、レスリング界のトップとして頑張っておられました我がOB会の名誉会長松井清OBが、今般、日本レスリング協会の副会長、全日本学生

レスリング連盟の会長、併せて母校の体育OB会の会長の要職からも、「後進に道を譲り、組織の活性化を図る」べく、勇退されました。誠に残念ではありますが、先輩におかれましては、今後とも益々ご健康に留意せられ、当OB会の発展のためにご専心賜り、一層のご指導、ご支援をお願い申し上げます。

また国際審判員として、総監督として、母校文学部教授として、大車輪のご活躍の伴義孝OBが、4月1日よりIOC本部へ1年間の予定で、スポーツの振興、特にレスリングについて、益々のご研鑽を積まれるべく出向されました。その留守中を、佐々木徹OBが、高堂先生をはじめ、藤田裕充監督、佐藤秀雄、横山博行両コーチともども、現役の指導育成に、総監督として頑張っておられたこととなりました。佐々木OBは、元監督として、また大阪府レスリング協会理事長として、永年にわたって、円満なるご人格のもとに、卓越するご指導を発揮されてこられましたことは周知のとおりであります。伴OBも心配なく研究に専念できて、多大の成果を得られることと、ご同慶のことではあります。

我がOB会も試行錯誤ではありますが、「現状に止まることは衰退につながる」との認識をもって、現状のかかる混乱の時代にこそ会員相互の親睦を第一義として定めながら、「心のオアシス」としての平常心を覚えるOB会でありたいと念願し、会員諸兄の倍旧のご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。(溝畑武夫手記「OB会誌」)

(完)



関西大学「創立者のレリーフ」（関西大学会館玄関ホールに設置）

明治十九年、西暦一八八六年、十一月四日、学ぼうとする志と教えようとする志が鏘然と火を發し光を放って誕生した「関西法律学校」の百年の歩みがここにあります。六学部・大学院・学生二万有余、教職員一千名有余、校友十八万有余の今日に至るまで初めの志がどのように伝えられて来たか。…（中略）
…。学歌にも歌われた「真理の討究、学の実化」が、このようにして脈々と伝えられて、昭和六十一年、西暦一九八六年、十一月四日に至ったのです。

「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と申します。

今日の佳き日の、この「天の時」を、ともに寿いでいただきたい。

この恵まれた「地の利」を、共に喜んでいただきたい。

そして何よりも、この「人の和」に、共に来たり加わっていただきたい。

関西大学学長 大西昭男

（現学校法人関西大学理事長）

出典 『関西大学百年のあゆみ』